

喬旦加布

1. 事業実施の目的

本調査の目的は調査地である中国青海省同仁県周辺で伝統的に行われてきた「ルロ祭」と呼ばれる祭祀儀礼の最近の変化と博士論文の完成に向けて補充調査を行うことである。

2. 実施場所

中国青海省黄南蔵族自治州同仁県・ウォッコル村、ガセドゥ村、ハラバトル村
青海省西寧市・青海省図書館、青海民族大学

3. 実施期日

平成 29 年 7 月 15 日（土）から 8 月 10 日（木）

4. 成果報告

●事業の概要

報告者は平成 29 年度地域文化学・比較文化学専攻学生派遣事業の支援を受け、調査地である中国青海省黄南蔵族自治州同仁県に赴き、同県周辺で伝統的に行われてきた「ルロ祭」と呼ばれる祭祀儀礼の最近の変化を中心に、フィールド調査を行った。その後、青海民族大学および同県の資料館、ハワ（シャーマン）の家を訪問し、同仁県及びウォッコル村の歴史、民族的アイデンティティ、山神崇拜などについて博士論文の補充調査を実施した。

日程に沿った具体的調査内容は以下の通りである。

平成 29 年 7 月 16 日から 7 月 23 日にかけて主に同仁県のウォッコル村とガセドゥ村、ハラバトル村の三村を中心に、年に一度しか行わない土着神を祀る儀礼の最近の変容についてフィールド調査を行った。この祭祀儀礼は農業地域の人々にとって重要な収穫祭であり、村人が山の神々へ感謝の意を込めて行う伝統的な祭祀である。この土着神を祀る「ルロ祭」は、同仁県以外のチベット地域では行われていない、数少ない極めて重要な儀礼であり、チベット仏教の歴史的な要素とともに、仏教以前のボン教、古代吐蕃王国と唐朝との確執とさまざまな民族の文化の融合・同化の痕跡が見られる。この祭りの過程で、土着神がシャーマンの職能者であるハワに憑依し、祭りを指揮し、山羊の供儀を行う。また、踊り手は普段とは異なる扮装をし、口や背中に数本の針を刺して踊る。更に、この儀礼は、農業を巡る水の争いや部族間のトラブルなどの歴史を反映させた演目が多いのも特徴である。しかし、近年、経済開発と観光化、無形文化遺産への登録及びチベット仏教の影響などにより、様々な変化が生じている。

今回の調査で報告者は、主に参与観察と聞き取り調査の手法を用いながら、カメラやビデオなどでルロ祭の最初から最後までまでの儀礼の過程を時間的、空間的に詳細に記録し、視聴覚資料の作成に努めた。今回の調査では村の廟の景観や踊り手の民族衣装、儀礼の演目及び形式などに更なる変化が顕著であることが観察できた。三村とも物質的に充実してきており、廟の新築と民族衣装の統一、新たな演目の導入など三村間の競争も激しい。例えば、ウォッコル村の場合は、今年、70万人民元を投入し、廟の隣に新たな周辺村の演者を案内する休憩所の建物が完成し、それに政府関係者の専用席を設け、招待料理も豊富になった。一方、神々への生贄の供儀は高僧の干渉によって2014年に完全に止めさせられ、代わりにツァンパ（大麦粉）とバターで作られた人形を供えることになったが、近年、政府関係者の招待料理に使う肉の量が年々増加してきている。そのため、今年のルロ祭の時、ハワがそれに怒り、「お前人間らが3〜4頭の羊を食うなら、俺にも供儀すべきだ」として再び、肉の供儀を一時的に復活させることになったのである。



写真1 ツァンパとバターで作られた山羊の人形



写真2 カメラマンに囲まれた演者、針を刺す村人

このように儀礼の変化の要因は様々であり、今回の補足調査では従来のウォッコル村とガセドゥ村、ハラバトル村の三村に限定せず、同県の土族村であるセンゲション村とニェントフ村も視野に入れて比較調査を行った。

平成29年7月24日から8月8日かけて青海民族大学及び青海省図書館、同仁県資料館、引退したハワ（シャーマン）の家などを訪問し、主に調査村の歴史と民族的アイデンティティ、儀礼の意味と伝説などについて聞き取り調査とチベット語および漢語史料などの文献調査を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

青海省黄南州同仁県においてワッコル村とガセドゥ村、ハラバトル村の三村と周辺の土族村におけるルロ祭のフィールド調査と博論の執筆に当たって補充調査を行った。

これにより同じく土族の村であってもセンゲンション村の場合、ワッコル村と比較すると廟の規模が小さく、ルロ祭の演目と民族衣装にも変化が少なく、伝統的土族の民族衣装を保持していることが明らかになった。

また、青海民族大学においてチベット学及び宗教学を専門とする研究者と議論も行き、博士論文の執筆について有益なアドバイスやコメントを賜うことができた。

本調査を実施することにより、報告者の研究の不足点を具体的に明らかにできたと共に、博論の執筆に当たって情報を補足的に収集することができた。申請者は今回の儀礼の調査と資料収集を通して、博士論文完成へと更に近づくことができた。

●本事業について

人類学を専攻する大学院生にとってフィールド調査や学会発表などの研究活動は非常に重要であり、今回、学生派遣事業の援助よりルロ祭の最近の変化と博論の執筆に当たっての補充調査ができた。この事業は非常に有益な事業であり、今後とも継続して欲しい。